

## いざというときに備えて

### 下阪本学区自主防災会編

平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災では、自治体の庁舎や首長を始めとした職員が被災し、「公助」が十分に機能しない状況に陥りました。このような状況下では、自分の身は自分で守る「自助」と近隣の住民で助け合う「共助」に頼るしかありません。

**平成 7 年に 1 月に発生した阪神・淡路大震災では、生き埋めや閉じ込められた人の 90%強が、家族（自力含）や近所の住民らによって救出されたという報告が如実にそのことを示しています。**一方、救助隊に救出された人は 2%弱です。

各地で起こっている災害の例からも、普段から支え合う関係を近隣同士でつくり、地域社会とのつながりを築くことの重要性がみえてきます。大災害から自分を守るキーワードは、『支え合う関係』でコミュニティにおいてそれを構築できるかが問われています。

下阪本地区自主防災会は、小谷忠一会長を先頭に「自分の命は自分で守る」、そして「自分たちの地域は自分たちで守る」ことを念頭に、安心・安全に暮らせるまちづくりを目指した防災活動に取り組んでおられます。同時に、いざというときに備えて活動されています。新型コロナウイルスの影響で中止せざるを得ない活動もありますが、自主防災会での主な活動は次の通りです。

#### ①防災用資機材の整備・点検活動、そして防災巡視

保存水食料品の賞味期限は？、防災器具等の数量は？、使い方は？、引き継ぎは？等。いざというときに使えなければ、防災用品の役目は果たせません。必要な資機材を準備しておき、日頃から点検や使用方法を確認しています。年に 3 回、自主防災会役員で防災用資機材の整備・点検を行っています。

何よりも防災の基本は、自分の住む町をよく知ることです。地域内の危険箇所や防災上の問題点を関係者で協議し、改善する必要がある場合は、対策を立てて対応しています。



#### ②防災研修会等に参加して

安全で住みよい地域社会を実現するためには、地域の安全活動を活性化させることが重要であります。地域活動が効果的に推進されるよう、大津市の防災研修会に年に 2 回、下阪本小学校運営委員会に年に 4 回参加しています。そこで、防災に関するノウハウや学校の願いを聞いて防災活動に役立てています。

#### ③防災訓練の実施

地域の皆さんを巻き込んで、避難誘導訓練、情報収集伝達訓練、バケツリレーや消火訓練、救出・救護訓練。さらに各ブースでは、展示コーナーや「AED」を使用した応急処置コーナー、起震車による地震体験コーナーを設置したこともあります。年によって趣向は違いますが、毎年 9 月に防災訓練を下阪本小学校のグラウンドで実施しています。訓練は、学区民の防災意識の高揚と災害発生時の被害を軽減することを目的として、下阪本学区の住民、自主防災組織の代表者など総勢 500 名ほどの参加があります。防災訓練を通して、地域を繋いでいければと考えています。今後、下阪本小学校や事業所等を巻き込んだ防災訓練が実施できればと思っています。



#### ④下阪本小学校防災教育の支援

下阪本小学校の『夢プロジェクト（防災プロジェクト）』に協力しています。3 年生には、火起こし体験のお手伝い。4 年生の防災教育（避難所体験）では、簡易トイレやダンボールベットを使った体験学習、並びに防災に関する授業を担当。5 年生には「かまどベンチ」でお米炊き体験（収穫祭）、6 年生には防災教育の一環で「かまどベンチ」を使った炊き出し体験のお手伝い。



**ただ、自主防災会では、人材に育成ができていないという課題があります。地域には「防災」に興味を持った方が大勢おられると思います。そのような人と一緒に防災を学ぶことにより、自主防災組織の強化につながります。下阪本の防災を担って下さる方を募集しています。気楽に自主防災会を訪ねて下さい。【小谷会長まで Te l 077-578-2387】**

## 比叡辻に室町幕府の仮御所があった！？

15 世紀から 16 世紀にかけての頃、比叡山延暦寺を境として琵琶湖側を「東坂本」、京都側を「西坂本」と称し、下坂本、上坂本を始め、穴太、唐崎、比叡辻、苗鹿等々、東坂本の村々は広義に坂本村と呼ばれていた。東坂本は京の都に次ぐ人口と都市形態を有し、その繁栄ぶりには目を見張るものがあり一地方都市ながらも経済力と活動力を誇っていた。

なかでも浜坂本とも呼ばれていた下坂本は多くの湊を有するとともに、馬借や車借（運送業者）、土倉（金融業者）や問丸（問屋）が多く居住していた。山中越えや白鳥越えなどを介して都への物流事業の中核を構成しており、比叡山延暦寺や日吉大社を頂点とする利権管理構造と収奪には絶大なものがありながら着実に資力や人力を備え、都の繁栄を支える交易都市となっていた。



— 馬借 —



— 強訴 —

これには北国・東国はもとより越前から更に日本海を越え大陸との交易等、大量の物流が基盤にあって幕府を頂点とする当時の政治構造は延暦寺や日吉大社を抱え込み、莫大な輸送量を坂本一箇所に集中させるなど、舟運による大量輸送を可能とする琵琶湖の存在も大きく関連していた。

このような社会構造は京に都が遷都されて以降急激に進展していったと考えられるが、帝を頂点と仰ぐ社会構造は、平安貴族の没落や戦国武士の台頭による幕府の弱体化も伴って徐々に不安定な社会情勢を招き、特に応仁の乱以降、室町幕府は勿論、延暦寺等の権勢も衰退を極めた。

応仁の乱の契機とされる 6 代将軍足利義教の暗殺以降、その権力闘争はとどまることなく約 10 年を超える長期にも及んだ。その影響で都は焼け野原と化した。特に細川や三好、松永などの戦国大名は将軍の暗殺をも平生として実行するなど室町幕府は機能を果たせない状況に陥っていた。

#### < 足利義晴の京都出奔行程概要 >

大永 7 年 02 月	1527/02	坂本へ出奔	天文 3 年 09 月	1534/09	京都へ復帰
大永 7 年 10 月	1527/10	京都へ復帰	天文 10 年 11 月	1541/11	坂本へ出奔
大永 8 年 05 月	1528/05	坂本へ出奔	天文 11 年 03 月	1542/03	京都へ復帰
享禄元年 09 月	1528/09	朽木へ出奔	天文 15 年 12 月	1546/12	坂本へ出奔
享禄 4 年 02 月	1531/02	坂本へ復帰	天文 15 年 12 月	同年 /12/24	京都へ復帰
天文元年 08 月	1532/08	桑実寺出奔	天文 18 年 06 月	1549/06	坂本へ出奔
天文 3 年 06 月	1534/06	坂本へ復帰	天文 19 年 05 月	1550/05	穴太で病没

室町幕府の権力中枢を担うべき第 12 代将軍足利義晴の権威は地に落ち、各地の守護大名が権勢を誇る戦国時代となった。この頃には延暦寺や日吉大社の統率力や風紀も乱れて権威は目を覆うような状況にあり、直接の戦火を免れた坂本への避難はもとより更なる安寧を求めて堅田や朽木、さらには琵琶湖を渡って安土桑実寺などの東国へ疎開する公家や貴族、文化人や僧侶等が多かった。

坂本の馬借などを主勢力とした度重なる都への強訴などは何よりもそれを物語っているが、近江坂本を支配下に置く六角高頼を後ろ盾とする坂本の街は、足利将軍の避難先として十分に機能する街として 5 度にも及び足利義晴の逃亡を助長することとなった。

そのような状況にあっても足利義晴の上洛意欲は旺盛であり、坂本の宝泉寺（比叡辻 1 丁目：廃寺）を根拠地として常に入京の機会を模索し、穴太まで歩みを進めるも病魔に斃れた。当寺は“宝泉寺御所”と称されていたとされ（万松院殿穴太記）。また、「興地志略」には「法善寺旧跡」とあり、「比叡辻ノ北ニアリトハイヘドモ今不詳、足利将軍義輝（13 代将軍）寄宿セラレシ処ノ宝泉寺トハ是ナルニヤ」と記されている。

これらから、下阪本比叡辻に存在したとされる“宝泉寺”なる寺院が臨時の幕府として存在したと考えられるが、その機能を維持していたか否かについては定かではない。



足利義晴供養塔  
(穴太自治会館前)